

子供たちの気持ちを知るく、子供らしくさせなければならぬと思いました。よく聞いてみると、これまで子供たちを世話していた人は、ただ、子供に食べさせてやり、世話してやっているのだという気持ちで、やっかい者扱あつかいにしてきたということでした。

そこで、岩子は、このたよる人のない子供、親からはなれて生活している子供を、心からあわれみ、あたたかい心で一生けんめいに世話をしました。

やがて、岩子の心が子供たちに通じ、岩子のまわりでは、遊びまわる子供でいっぱいになり、笑い声が部屋中に聞えるようになりました。

また、この子供たちに職業をあたえるため、紙袋張かみぶくろはりや紙箱の作り方を教え、養育院よういくいんの近くの商店や工場に話をして働かせてもらうようにしました。しかし、ふるさと会津地方の人々の願いによって岩子は、養育院の仕事をハカ月でやめて若松に帰りました。若松の人々は、岩子を喜んで迎え、貧しい子やみなし子